

2021年5月NHK近畿地方放送番組審議会

5月のNHK近畿地方放送番組審議会は、19日(水)、NHK大阪拠点放送局(ウェブ開催)において、8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「2020年度近畿地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて事前に視聴してもらった、「NHKスペシャル 追跡“コロナ犯罪”」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

- 委員長 篠 雅廣(大阪市立美術館 館長)
副委員長 帯野久美子(関西経済同友会 常任幹事)
委員 黒木 麻実(公益社団法人 全国消費生活相談員協会
関西支部副支部長)
佐伯 順子(同志社大学社会学部 教授)
笹岡 隆甫(華道 未生流笹岡 三代家元)
鈴木 元子(杉本や編集処 編集者)
堀江 尚子(認定NPO法人 くさつ未来プロジェクト 代表)
矢崎 和彦((株)フェリシモ 代表取締役社長)

(主な発言)

<NHKスペシャル「追跡“コロナ犯罪”」(4月3日(土)放送)について>

- 番組を見て、2019年7月27日(土)放送のNHKスペシャル「半グレ 反社会勢力の実像」を見たときと同様に、暗たんたる気持ちになった。実際に罪を犯した人や、その人たちを犯罪に加担させる集団を取材した中身の濃い番組で、オダギリジョーさんのナレーションが重みを与えていた。持続化給付金の不正受給が大学生や主婦にまで広がっていることや、その人たちに「罪を犯している」という感覚がないことに驚くとともに、ねずみ講と同じ構図だと思った。一方、弁護士へのインタビューからは、収入が減少して精神的に追い詰められると正常な判断ができなくなることがあるということもわかり、番組に登場する結婚式場の経

営者のように、社員の雇用を守るための雇用調整助成金の不正受給も、頭ごなしに非難できないと感じた。弱い人たちにつけこむ人や、反社会的勢力をどうにかしないとこうした犯罪はなくならないと思う。新型コロナウイルスの感染拡大が収束しても、再び社会不安が広がれば、また同じようなことが起こるのではという出口の見えない気持ちになった。

- 社会情勢にすばやく反応した有意義な番組だった。単発の犯罪だけでなく、脅され続ける継続的な恐ろしさ、はまってしまうと抜けられない恐ろしさも指摘していた。若者への犯罪防止に関する啓発という意味でも重要な番組だ。番組の中で、オンライン授業になったことで大学生の闇バイトへの応募が増えたというようなコメントがあったが、一方で、オンライン授業によって学習成果が上がっている学生もいるので、「オンライン授業が犯罪につながる」とも受け取れるような表現が気になった。また、番組では犯罪からはほど遠いと思われる主婦たちまでが、不正受給をしたケースが紹介されていたが、どういう動機で犯罪に手を出したのか。生活に困ってなのか、生活水準を落とすたくないからなのか、この問題を深く捉えるうえで知りたいと思った。
- 普通の主婦や学生が越えてはいけない一線を簡単に越える状況に寒気を覚えた。「罪悪感がないわけではない」という闇バイトの指示役へのSNSでの聞き取りや、反社会的勢力へ迫る姿勢にジャーナリズムの力を感じた。目を背けたくなるような“コロナ犯罪”の闇を伝えることで、犯罪防止を訴える役割を果たしているのではないか。“コロナ犯罪”に関する相談窓口の二次元コードが画面上にでていたのもよかった。番組全体を通して終始暗い内容だったので、前向きな話題や、救いを感じさせる部分があれば、なおよかったのではないか。
- 今の日本の状況を、緊迫感がある迫り方で伝えるよい番組で、抑えたトーンの内레이션に引き込まれた。情報源である、犯罪組織の指示役に聞く苦労もあったと思うし、丁寧な積み重ねが必要な取材だったのではないか。相談窓口の二次元コードもよかった。比較的簡単な手続きで給付金を申請できることから、不正受給が大量に発生することは容易に想像できたが、ごく普通の主婦たちのランチ会などを通じて、不正受給が広がっていたという事実衝撃を受けた。今回の番組の内容を広く伝えることで犯罪の抑制、被害の防止につながればいいと思うが、SNSをうまく活用するなどすれば、若者にも効果的に訴求できるのではないか。エンディング

の黒い模様が広がる演出は、わかりやすく強烈で、番組内容とは別の生理的な恐怖も感じた。途中カラスが映るシーンがあったが、犯罪を扱う番組ではよく使われており、これもイメージとしてわかりやすく、鳥や自然で表現するのはいい方法だと思う。

- 番組の終わり方とナレーションが怖かったが、それゆえに引き締まった番組だった。見終わった後に、新型コロナウイルスの影響で犯罪が増えていくことへの危機感や不安感があった。“コロナ犯罪”は感染に関する情報の陰に隠れている部分もあるので、社会の課題として取り上げたことはよかった。大人が子どもたちに伝えなければいけないインターネットに広がる犯罪の恐ろしさや、生活者として私たちが“コロナ犯罪”に巻き込まれないようにすることの大切さを教えてくれたと思う。ただ、本当に持続化給付金を必要としている人がいることにも触れられていればなおよかった。前半、主婦たちがランチ会をきっかけとして気軽に犯罪に手を染めてしまうことには、新型コロナウイルスそのもの以上に恐ろしさを感じた。また、逮捕されていない加害者に対するNHKの取材力にはいつも驚かされるが、後半に出てきた犯罪者組織の指示役がまだ逮捕されていないということから事態の深刻さを感じた。
- テレビで伝える新型コロナウイルスの話題は、どれだけ死者や感染者が増えているかという感染拡大の話題が多いが、全く違った切り口の番組であり新鮮だった。一般人が犯罪に巻き込まれているという異常事態を知らせる意味で有意義であり、事実関係をよく調べていると感じた。番組の内容というより、犯罪が横行している事実がショックであり、気持ちが重くなった。コロナ禍が巻き起こしている犯罪がテーマだったが、国が矢継ぎ早に出した対策のそもそもの制度設計についても伝えたらよかったのではないか。テレビを見ていると新型コロナウイルスの話題ばかりで先行きが暗いと感じるが、見ている人に希望を与える番組ももっと作ってほしい。
- 番組を見ていてやるせない思いに駆られた。東日本大震災の時も同じように給付金の制度を利用した、被災者をだますような犯罪が多かったが、悪い人はいつでもいるものだと感じた。“コロナ犯罪”がこれまでの犯罪と違うのは、簡略化した手続きで給付金がもらえてしまう制度設計を悪用した犯罪だということ。そして時代の流れなのか、SNSを使って、人々が安易に巻き込まれてしまうことだ。

前半が不正受給で後半が闇バイトという構成だったが、どちらも新型コロナウイルス感染拡大で生活を追い詰められた人たちが犯罪に手を染めてしまっていた。警察が主婦たちを取り調べた内容のナレーションが、無理のある関西ことばで気になったが、全体的には、犯罪に巻き込まれないように、被害を受けないように、安易に加害者にならないようにと示唆した、貴重な番組だ。

- 犯罪の手口自体は古典的だが、先が見えない時代の中では、経済的に困っているということもあり、人は一時の欲望に身を任せてしまう傾向がある。インターネットやSNSの浸透によって匿名性が保障されているという幻想があり、それによって「ばれなければいい」などと犯罪に対するハードルが低くなっていることはネット社会の功罪の一つだ。悪い方向に知恵を働かせる人がたくさんいることにやるせなさを感じた。

(NHK側)

新型コロナウイルスの感染拡大は1年以上にわたる、かつて事態であり、あらゆる制度で対策が講じられている。そのうちの一つが持続化給付金であり、多くの税金が投じられている。これをねらった“コロナ犯罪”が身近なところまで迫ってきていることをしっかりと取材し、まずは実態を伝えることが番組の第一の目的だ。こうした事態は長く続くことが予想され、今後も新たな闇が発生するかもしれないが、引き続き実態を明らかにして犯罪の防止につなげていきたい。

(NHK側)

今回は犯罪や不正にいたる背景の実態に迫ることで、同じことを起こさせないという目的で制作した。また、いろいろな世代の方に届けるため、番組の放送に加え、ホームページでダイジェスト版も発信した。主婦の動機についてはさまざまな背景があるが、その一例として今回の放送では2人の主婦が「軽率な行動だった」と発言した部分を紹介した。映像やナレーションなど表現方法に関する意見は、今後の参考にしたい。

- つくづく世の中には悪いほうに頭の切れる人がいるもので、持続化給付金と聞き、仕事がなくなる人たちに対しての制度を金儲けに結び付ける悪知恵には驚くばかりだ。もっと世の中のために役立つことに頭を使ってくれたらと願うばかりだ。

<放送番組一般について>

- 3月28日(日)の目撃！にっぽん「京都“おせっかいバンカー”物語」を見た。見終わった後、気持ちが温くなる、よい番組だった。理事長の話や、意思決定、統率力には説得力を感じた。金融業にもかかわらずノルマを撤廃し、お金の付き合いだけではないおせっかいを大事に、目先の利益を追わない方針は、いわゆる一般的な金融業界とは一線を画しており、その部分をしっかりと取材していたと思う。一方で、どうして京都のこの信用金庫を取り上げたのか疑問に感じた。頑張る個人を取り上げていることは多いが、この規模の事業者を実名で取り上げているのは珍しいと感じる。この番組フォーマットを活用し、頑張っている企業を紹介する企画をシリーズ化したらおもしろいのではないか。
- 番組を見て明るい気持ちになった。番組で紹介されていた信用金庫が、会社の重点方針として地域で街づくりの取り組みを応援していることを知り、うれしくなった。仕事の第一の目的は利益をあげるのではなく、困っている人を助けることだと再確認できた。リスクをとってまでも頑張る人や企業を応援する番組もあり、元気をもらえた。こんな時代でも未来に向けてできることがあると感じさせられて、やる気がでた。
- 新規と既存の顧客の区別なく飛び込みで悩み事を聞く活動はおもしろいと思うし、地域に根付いた信用金庫ならではの仕事だと感じた。番組内で若手営業マンの心情としてコメントされていた「手ごたえがない」という言葉は、信金の利益につながることへの手ごたえなのか、相手企業の商売の後押しになるかどうかの手ごたえなのか、どちらの意味なのかが明確にわからず、違和感があった。全体としてはよい話だが、メリハリに欠けたので、見終わった後の印象は薄い。番組の途中でBGMで使われていたジャズのような音楽が合っていなかったのが気になった。
- 新型コロナウイルス感染拡大の厳しい状況の中、地道に前を向いて頑張る人の姿に好感を持った。金融機関も経営が厳しい中、ノルマを撤廃して地域の悩み事のおせっかいをするという経営判断は見事だと感じた。金融機関の仕事はある種

の冷たさを感じるが、家族的で温もりがある姿勢は見ていて安心した。支店でのおせっかいの会議は心温まった。目先の利益より街の長期的な発展を目指すのは実に京都らしく、番組で取り上げられた信用金庫の未来の姿も見たいと感じた。

- 地域密着型の信用金庫として、地域の活性化に貢献しようとする意欲がよく伝わってきた。地方の金融機関で働く人にとって勇気づけられたと思うし、番組では女性職員も多く議論に参加しており、女性参画という意味でもよかった。信用金庫の若手営業マンの謙虚な姿勢には好感が持てたし、音楽もナレーションも内容にあった。一方で、成功例としてプラスチック加工会社が紹介されていたが、長い目で見るとプラスチックは環境に負荷をかけるという議論もあり、気になった。放送時間の制約もあると思うが、今回の事例以外にも成功例があれば、取り上げてほしいと感じた。「上げなきゃいけない実績とは何なのか」という、人生に対して間接的な問いかけもあり、非常に深い番組だった。
- 番組を見て救われた気分になった。京都市は以前から財政が危機的な状況にあるが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で観光客が激減しており、さらに悪化している。そうした中、地域の事業者におせっかいを焼くという取り組みは、地域密着型ならでも、メガバンクには難しいことだと思う。信用金庫の営業マンが定食屋のメニューまで考えるのかと思い、金融機関の違う一面を見ることができた。業績回復がすぐに見えるわけではないと思うが、地域密着型の地道な取り組みによって地域が元気になってほしいと思える、よい番組だった。
- 心温まる番組だった。バンカーとして働く人たちがこの番組をみてどう感じるのかと思った。時間をかけてもお客様のもとへ足を運んで話をするのは、京都だから、この理事長だから、信用金庫だからというわけではなく、金融業の原点だ。合理化が進んでしまっていて、番組内でも理事長が金融業を取り巻く環境の変化と言っていたが、バンカー自身も立ち位置が見えなくなっているのではないか。新型コロナウイルスやIT化によって今後環境が激変する企業は金融機関だけではない。困ったときは原点をもういちど見直し、時間がかかっても顧客との関係を見直すことが必要になるのではと感じさせられる番組だった。ラストカットの夕日が印象的だった。
- 仕事は現場にヒントがあり、そこに立ち返る態度を理事長自ら示しており、感

銘を受けた。京都は先祖代々から住む人が多い土地柄でもあり、目先の利益を追わずにおせっかいをする方法は、新しいビジネスモデルだとも思う。公共放送であるNHKが企業名を取り上げる際の基準等があれば知りたい。

(NHK側)

この番組では、独自の取り組みをしている京都の信用金庫を追った。緊急事態宣言が延長して厳しい状況が続くが、京都局では日々の感染状況やワクチン接種の情報に加えて、新型コロナウイルス感染拡大下の逆境を乗り越えるヒントになる情報も随時発信していきたいと考えている。今回の番組も「京都スペシャル」、「ニュース630 京いちにち」の企画といった、取材の積み重ねで実を結んだ番組だ。私自身、地域放送局として地域の人たちのために何ができるかということ、根本から見直すきっかけにもなった。紹介したのは一つの信用金庫の取り組みだが、京都に限らず、金融業界に限らず、あらゆる企業にとって普遍的なテーマを投げかけることができたのではないかと感じている。

(NHK側)

今回の信用金庫を取り上げたきっかけは、新型コロナウイルス感染拡大で、地域がピンチに陥る中、運転資金に困っている企業をどう支えるかということだった。また、さまざまな金融機関がある中で、信用金庫は非営利法人であり、営業範囲や融資先も地域の中小企業に限定されている。最も地域に近い金融機関として中小企業と歩んでいく姿を取材した。長期的には企業も減り、衰退しつつある地方の経済をどう支え、どう一緒に生きていくことができるかが見えてくるのではないかと思っている。BGMについては、硬くなりがちな金融機関について話を見やすくなるように意識したが、意見は今後の参考にしたい。また、成功例については、プラスチック加工会社以外にもあるが、比較的直近でわかりやすい事例であったので紹介した。

(NHK側)

企業名の放送については、NHKが定めた取材・制作の基本姿勢を記した「放送ガイドライン」に則っている。例えば放送、インターネットの展開で企業名を使う場合、本質的に必要なのか、他の表現に置き換えられないか、視聴者の理解を助けることになるか、ライバル企業などが

ら見て著しく不公平でないか、番組の構成や演出上やむを得ないかなどを、判断の基準としている。企業名を出す場合でも回数を工夫するなど、広告と受け取られることのないようにしている。

- メガバンクにはないような取り組みで感心した。私の居住する地域にも困っていることを相談すると、自社の顧客を紹介してくれる取り組みをしている金融機関がある。このように地域に根差した金融機関が、番組内の例のように今後発展してくのだろう。
- 4月27日(月)のよみがえる新日本紀行「浪華芸人横丁～大阪天王寺 山王町～」(総合 後 2:05～2:45)を見た。昭和46年に放送した「新日本紀行」の映像をもとに、昔の大阪の芸人の暮らしぶりを伝えており、有意義だと感じた。
- 5月3日(月)の「みんなパスカル！」(総合 後 8:00～8:45)というクイズ番組がとてもよかった。正解率を競うのではなく、低迷する観光地をどう盛り上げるかといった社会問題を考える過程を楽しむ番組だが、アクティブラーニングのお手本のように感じた。教育的効果の高い番組だと思うので、全国の子どもたちに見てほしい。
- 5月9日(日)のNHK関東甲信越地方放送番組審議会「4月の審議から」を見た。各地の放送審議会の様子を番組では初めて見たが、関東甲信越の地域番組や放送番組審議会での議論を知ることができて勉強になった。

(NHK側)

各地の放送番組審議会の公表番組についてだが、NHKでは8つの地域で放送番組審議会が開催されており、それぞれの地域で、毎月第2日曜日に番組審議会の内容を放送している。

- 「ニュース きん5時」を見た。以前と比べ「I P P O U」の意味が分かりやすくなった。また、関東でこの番組を見ると、関西ことばが新鮮だったし、大阪府豊中市の話題が興味深く感じられた。テレビ番組は、生活する文脈の中で見ているもので、この番組は関西以外の地域で見るほうが意義ある番組だと感じた。

「やまと尼寺 精進日記」はいつも興味深く見ている。「ウィズ コロナ」の時代に自然とともに暮らす生活が見られる番組で、女性たちが共同で老後も仲よく

暮らすというメッセージも受け止めることができ、好感を持っている。

3月28日(日)のBS1スペシャル「満州 難民感染都市<前編>知られざる悲劇」(BS1 後 10:00~10:50)、「満州 難民感染都市<後編>祖国への脱出」(BS1 後 11:00~11:49)は、歴史を知るうえで大事な番組だと感じた。

NHK大阪拠点放送局
番組審議会事務局

2021年4月NHK近畿地方放送番組審議会

4月のNHK近畿地方放送番組審議会は、21日(水)、NHK大阪拠点放送局(ウェブ開催)において、8人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「ニュース きん5時」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

- 委員長 篠 雅廣(大阪市立美術館 館長)
副委員長 帯野久美子(関西経済同友会 常任幹事)
委員 黒木 麻実(公益社団法人 全国消費生活相談員協会
関西支部副支部長)
佐伯 順子(同志社大学社会学部 教授)
笹岡 隆甫(華道 未生流笹岡 三代家元)
鈴木 元子(杉本や編集処 編集者)
堀江 尚子(認定NPO法人 くさつ未来プロジェクト 代表)
矢崎 和彦((株)フェリシモ 代表取締役社長)

(主な発言)

<「ニュース きん5時」(総合 4月2日(金)放送)について>

- 冒頭で「埋もれた地方の情報をお伝えします」と宣言していたが、愛知のパラセーリングの話題以外は関西の話題だったので、もう少し広く日本各地の情報があればよかった。出演したタレントは情報番組にしては暗い印象に感じた。初回だったからかキャスター2人に硬さはあったが、武田真一アナウンサーに期待している。
- 番組に出演するタレントに関しては、盛り上げようとしすぎず、冷静なコメントがよかった。関西発で、東京とは違う視点から情報発信することは有意義だが、この点を強調しすぎると、東京への対抗意識が目立ち、全国の視聴者には抵抗感

があるかもしれない。「ニュース きん5時」というタイトルは、「ニュース シブ5時」を意識してなのか、タイトルの由来を知りたいと思った。また、スタジオのセットは、関西全体の一体感が伝わるようなデザインのほうがよいのではないか。また、番組のテーマソングがヒップホップで若者を意識しすぎていると感じた。また、「I P P O U新聞」というコーナータイトルの意味がよくわからなかった。

○ 武田アナウンサーをはじめとする出演者は、安心感があつた。タレントはコメント力が高く、石橋亜紗アナウンサーは落ち着きがあり、笑顔もよかった。「I P P O U新聞」では、「できないことがある中でプラスをみつけていく。それを見せられるのがパラリンピックだ」というアスリートの生の声が聞けたのはよかった。「夕顔 金曜午後5時の主婦たち」のコーナーは、メッセージとしてはよかったが、ドラマは必要ないように感じた。特によかったのは「K I N G O Z I N」で、90歳の総務部員の話からは、元気をもらった。また、「地方の埋もれている情報や個人の話題を伝える」という趣旨の番組だが、関西以外の地方の話題が少なかったので、今後に期待したい。また、大阪弁のナレーションについては、地方色を出す演出はほかにもあると思うので、無理に使う必要はないと思った。

○ 楽しく好印象の番組だった。武田アナウンサーは安心感があり、石橋アナウンサーも爽やかでよかった。オープニングについては、テーマソングが金曜夕方の開放感が感じられてよかったが、コーナー紹介の画面構成や、コーナーごとの見出しなど見にくいと思う部分もあった。「I P P O U新聞」は、「東京とは違う大阪独自の視点で伝える」という趣旨が、今回は感じられなかったので、今後に期待したい。ただ、NHKの夕方のニュースを見たいという視聴者に対しては、「大阪独自」をコメントやスタジオセットなどで強調する必要はないようにも感じた。「夕顔 金曜午後5時の主婦たち」については、コーナー名から受ける印象がよくないし、夕方の忙しい時間帯に見る内容とは思えなかった。お天気コーナーは気象予報士の塩見泰子さんの明るさと天気図の雰囲気は合っており、気持ちよく見られた。忙しい時間帯なので、各コーナーのオープニングでは趣旨を手短かに伝えてほしい。

○ 子育て中の母親にとっては子どもにEテレを見せて家事をしていることが多い

であろう時間帯なので、あまり視聴することにならないと思うが、ニュースと特集の要素があって楽しめる番組だった。「夕顔 金曜午後5時の主婦たち」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で公共施設が閉鎖される中、孤立する子育て世代にスポットをあてていることはよかったが、「ママ友ができない」というテーマについては、もう少し深掘りしてほしかった。「KINGOZIN」での、90代の総務部員の話はすばらしかったし、武田アナウンサーが地域に出向いて取材することにも大きな意味を感じた。2回目の4月16日(金)の回を見て、この番組がさらに好きになった。武田アナウンサーは「列島ニュース」によく出演しているが、第一線で活躍してきたアナウンサーが大阪から地方発のニュースを読むことで、NHKが地方を重視していることを感じた。

- コンセプトやターゲットがわかりにくかった。いろいろなものが盛り込まれ過ぎており焦点が定まらないように感じたが、ふだん見るものとしてはニュース寄りの番組がよいと思った。大阪局が東京の本部代替機能を担うという観点では、大阪発で地域のニュースを全国に伝えるよりも、「ニュースウォッチ9」などを週に1、2回、大阪局から発信するほうが本来の意味が果たせるように思う。「I P P O U新聞」はなぜ新聞に関連づけるのか疑問に感じた。いちばん興味深かったのは「KINGOZIN」で取材されていた90歳の総務部員の方の話で、何をどういう視点で取材するかを伝えるのが重要だと思った。1時間を超える番組なので、ほかのことをしながら見ることもあると思うが、少し長く感じた。
- 新しい番組で試行錯誤しているのだと思うが、番組の方向性がよくわからなかった。地方のニュースを全国に発信するということが、関西からの視点にあまりこだわらず、素直に地方の情報を伝えることで日本の多様性を考えるという姿勢でよいのではないか。埋もれている地方の情報をわざわざ掘り起こさなくても、東京の人は地方で当たり前の情報も知らないことが多い。例えば和歌山県白浜町でのパンダ繁殖の実績やワーケーションの成功事例、文化芸術のある町作りを目指して兵庫県豊岡市に開学した芸術文化観光専門職大学などは、全国ではあまり知られていないのではないか。こうした新しい地方の姿を全国に伝えることで、日本各地の多様性をみんなで考えていける番組になることを期待している。
- 「天災や有事における本部代替機能を持つ大阪拠点放送局の意義をアピールする番組」ということについては、冒頭でキャスターが趣旨を説明すれば十分だと

思った。金曜5時という週末の時間帯とはいえ、スタジオセットの棚に酒瓶が置いてあるなど、大阪は浮ついた町というイメージを与えはしないかと感じた。全国が多様なニュースや人々のあり方を大阪発で紹介するということだが、地方のニュースや出来事を選ぶ基準を知りたいと思った。また、番組のテーマソングは、若者を意識しすぎだと感じた。

(NHK側)

「ニュース きん5時」は新たな制作体制で取り組む新番組で、ニュース番組、福祉番組、芸能番組などを担当するさまざまなセクションから得意なスキルを持つスタッフが集まって試行錯誤しながら制作している。今後さらに磨きをかけて、大阪発の全国向け番組を盛り上げていきたい。番組タイトルは、月曜から木曜まで放送する「ニュース シブ5時」を意識したうえで、金曜日の「金」、近畿の「近」、金メダル級の「金」とかけており、金メダルをあげたくなるような元気ある話題を地方から届けたいという思いを込めた。

(NHK側)

金曜日の夕方の番組で、いろいろなニュースが入ってくる時間なので、速報で入ってきたものの中から必要な情報はただちに伝えるようにしている。ニュースの内容については、「日本の多様性を伝える」というコンセプトを今後も大事にしていきたい。

(NHK側)

近畿から全国各地の情報を発信する際、地方をどう取り上げるのか、その意味や目的、メッセージを考えながら、番組を制作している。新型コロナウイルスの影響下でロケがしにくくなる中、「列島ニュース」とは違う視点で、どのように全国各地の情報をとりあげるかは今後の課題だ。「IPPOU新聞」については、「ニュースの一報を一方から見たら」という趣旨がわかりやすくなるよう、次の放送からタイトル映像やコメントを変更した。また、番組のオープニングでは、各コーナーのラインナップもコンパクトに伝えるようにしている。スタジオセットのデザインについては、検討中だ。

- 地域の埋もれた情報を発掘し、全国に生中継で届けるというねらいはすばらしいと思った。そういったねらいの番組だとすると、例えば首相訪米の予定を伝えるなら地域の経済への影響や関係者の意見も知りたいし、台湾鉄道事故を伝えるなら地域の鉄道会社や車両会社との関わりなども知りたいと思った。「I P P O U新聞」や「K I N G O Z I N」で取材された方については、よく探し出したと感心した。

<放送番組一般について>

- 3月19日(金)のHYOGO+「もういっぺん“居場所”つくったる～神戸・老舗ギョーザ店 新たな出発～」(総合 後 10:45～11:12 兵庫県域放送)を見た。番組冒頭の印象とは異なり、深みのある番組でじっくり視聴することができた。取材された店に行列ができていたことは知っていたが、なぜこの店を取材したのかということや番組制作の意図も知りたいと思った。また、再オープン後の実質的な経営権や店長の立場について詳しく知りたいと思った。新型コロナウイルスの影響下でたくさんの飲食店が廃業に追い込まれる中、外部の経営サポートを受けて存続するスタイルについて詳しく伝えることで、同じような境遇にある人には大きなヒントとなるのではないかと。
- この老舗ギョーザ店は地域の人々にとって必要な居場所だというのがよく伝わった。時間が短かったせいもあり、一度番組を見ただけでは、閉店した理由や店長がなぜ泣いていたのかがわかりにくかったが、もう一度見直すと、閉店のきっかけとなった家族経営の難しさや、支援会社との経営方針の違いに対する店長の葛藤が理解できた。また、閉店した理由に新型コロナウイルス感染拡大による影響もあったかどうかを描かれていれば、見る人に役立つ番組になったと思う。
- 心温まる内容で、このギョーザ店に食べに行きたいと思った。ただ、雇われ店長という立場になっても味を守ろうという、肝心の店長の再出発にかける思いがストレートに伝わってこなかったのが残念だった。タイトルの「もういっぺん“居場所”を作ったる」というのは、店長から常連客へのことばというよりは、店を愛する常連客をはじめ周囲の人たちが店長に向けたことばのように思った。

- 店長と常連客の絆の物語で、「思い出は新しく作っていくもの」「あなたは一人じゃない」といった常連客の励ましなどが心にしみた。新型コロナウイルスの影響で人々の居場所が失われている厳しい状況にあるので、前向きな話題にうれしく感じた。支援会社はしっかりサポートしていると思うが、ビジネスライクに見え、ほかの常連客のぬくもりと対照的でやや気になったので、描き方にもうひと工夫あってもよかったのではないか。店長の思いが伝わるコメントがあれば、もう少し分かりやすい番組になったと思う。
- 小規模の飲食店が、新型コロナウイルスの影響で経営難に陥ることは他にもあると思うので、こうしたドキュメンタリーから、同じような苦難に直面している経営者たちが立ち直るためのヒントを得られれば意義深い。経営を立て直すために、第三者的な視点を入れたということだが、店長が「昔のお店でなくなってしまふような不安を抱えている」とも話しており、支援会社との意見の食い違いや葛藤があったと思う。それを乗り越えて店が活性化したことはとてもよかったと思うが、葛藤や本音の部分がより詳しく描かれていれば、同じような立場の飲食店の方にも参考になったのではないか。また、今回のようなケースが、ギョーザ店に限らず応用できるのか、知りたいと思った。
- 番組で紹介されたギョーザ店は以前から知っていた。1回目の緊急事態宣言後も営業していたと思うが、突然「閉店します」という張り紙が貼られて、本当に驚いた。その後、店が復活することを聞いて喜んでいたが、番組で初めて事情を知った。これからも頑張って続けてほしいと思った。
- 笑顔あり涙ありで、とても見やすい番組だった。神戸市の異人館にある「願いがかなえられる椅子」の場面で番組は始まったが、店長の「お客さんが戻って来ますように」という願いが、切実に表現されていたと思う。家族経営の場合、高齢化や後継者の問題に加え、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今後経営権を手放す小規模飲食店が増えていくのではないか。支援を受けることで、のれんと店長を残せることはよいことではあるが、店長の「昔の店でなくなる」というつぶやきに現れているように、光と影があるようにも感じた。また、店長への多くの人からの励ましからは、神戸のコミュニティーの力を垣間見ることができた。神戸には、大阪や京都と異なる独特のコミュニティーの力があると思うので、今後の番組でも焦点をあててほしいと思った。

- 新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって、外食産業の経営が厳しくなる中、人と人との交流によって再開にまでこぎつけることができたという、人情味あるできごとが描かれていた。一方で、資本面で支えになったとは思いますが、経営権を持つ支援会社の人からは、地元の人たちに愛されてきた歴史ある店だということあまり感じられず、心の半分は温まりながら、半分はやり切れなさを感じた。

(NHK側)

番組では、前半で地元の人との絆を描き、後半ではビジネスを通じて立て直していかざるを得ないという面も描いた。新型コロナウイルスの影響下、同じような状況の方々もいると思うので、そうした人たちに対して教訓や助言になるような情報を入れていくということは、今後も意識していきたい。

(NHK側)

担当ディレクターが、今回紹介したギョーザ店の再開についての貼り紙を見かけたことが番組制作のきっかけだった。63年続いてきた老舗のギョーザ店が、地域の人たちの心のよりどころとして愛される場所だったという点を大切にして番組制作を進めた。新型コロナウイルス感染拡大の影響下で飲食店が軒並み苦境に立たされ、店主たちが不安に駆られる中、番組を見た方がこうした飲食店や居場所に関心をもってもらえればという思いもある。神戸のコミュニティーの力など、地域を盛り立てていく力については、継続的に取材できればと思う。

- ギョーザ店を閉店した時点ではこのような展開になるとは予想できなかったはずで、心温まるエピソードだった。
- 4月17日(土)、18日(日)の「第75回全日本体操選手権」(総合 17日(土)後2:55~5:00、18日(日)後1:55~2:55)を見た。BS1では早い時間帯からいろいろな種目を中継していたが、地上波では後半の種目しか放送していなかったのも、足りなく感じた。また、複数の種目が同時に行われる競技の場合は、将来的に視聴者が好きな種目や選手を選択して見られるシステムが発達すると、おもしろいスポーツ中継になるのではないかと。また、解説は詳しいほうが視聴者には親切なので、

技の難易度や種類などに字幕スーパーを付けるといった工夫をすると、見やすくなると思う。

(NHK側)

土曜や日曜のスポーツ中継を総合テレビでどう編成するかについては、「大河ドラマ」の再放送や、「NHKのど自慢」など定時番組がある中で総合的に判断している。「同時に進行する競技において好きな種目などを選択して見られるシステム」については、現在の放送ではそうした仕組みは難しいが、過去のオリンピックなどの際に、インターネットライブ配信で一部好きな種目を選択して見られるという実験的な試みをしている。

- 3月13日(土)のザ・ヒューマン「命を描く画家 集大成の絵に挑む」を見た。奈良在住の日本画家である上村淳之さんを2年間にわたって丁寧に撮り続けたドキュメンタリーで、これまで上村さんの絵から抱いていた印象を大きくくつがえされる内容だった。上村さんの絵は幻想的でかわいらしい印象だが、描き上げるまでの過程が想像以上にストイックで驚いた。上村さんが病気を患い、弱気になっていたシーンも印象的だった。撮る側と撮られる側のよい関係が感じられる、心地よい番組だった。

NHK大阪拠点放送局
番組審議会事務局